訳注『風月小誌』第三号（上）

要木純一

【『風月小誌』第三号】

【表紙】

明治十三年八月発行

風月小誌第三号

風月吟社

【本文】

千紫万紅以粧二陽春一。人視以楽焉。詩之在二人世一。猶三花之在二陽春一。斐然粲然。以装二斯文一。作者楽焉。読者亦楽焉。然以二実用一論レ之。春花之爛熳。不レ及二秋実之穣々一也。詩之於二人事一亦然。昔人或謂二於レ詩可レ求二修身斉家平天下之道一。我不レ取也。郷人平賀静遠。勝田睡仙。頃編二同好之詩歌一。命云二風月小誌一。及二其第三稿成一。求二一言於レ余。余辞レ之。不レ聴。乃受而評レ之曰。巻中諸詩。綺麗嬌艶如二牡丹海棠一乎。冷淡高逸如二素梅碧李一乎。其他為レ杏。為レ桃。為二芍薬一。為二瑞香一。皆有二可レ観者一焉。而千紫万紅之爛熳。不三唯於二陽春一。四時不レ断二其芳一。則作者之楽可レ知。而読者之楽亦可レ知也。我復何贅哉。愛山高橋基一。識レ於二東京赤坂百花書屋一。

【訓読】千紫万紅以て陽春を粧う。人視て以て楽しむ（焉）。詩の（之）人の世に在るは、猶お花の（之）陽春に在るが如し。斐然粲然として、以て斯文を装い、作者楽しむ（焉）。読者も亦た楽しむ（焉）。然れども実用を以て之を論ずれば、春花の（之）爛熳たるは。秋実の（之）穣々たるに及ばざる也。詩の（之）人事におけるも亦た然り。昔人或いは詩に於いて修身斉家平天下の（之）道を求む可しと謂うも、我取らざ（不）る也。郷人平賀静遠、勝田睡仙、頃ろ同好の（之）詩歌を編んで、命じて風月小誌と云う。其の第三稿成るに及んで、一言を余に（於）求む。余之を辞するも、聴さず（不）。乃ち受けて（而）之を評して曰く、巻中の諸詩は、綺麗嬌艶たること牡丹海棠の如き乎。冷淡高逸たること素梅碧李の如き乎。其の他は杏為り、桃為り、芍薬為り、瑞香為り。皆観る可き者有り（焉）。而して千紫万紅の（之）爛熳たるは、唯だに陽春に於いてのみならず（不）、四時其の芳りを断たざ（不）れば、則ち作者の（之）楽しみ知る可し。而して読者の（之）楽しみも亦た知る可き也。我復た何をか贅せん哉。愛山高橋基一、東京赤坂百花書屋に（於）識す。

【大意】幾千万の紫や赤の様々な色の花が陽春の景色を彩る。人はそれらを見て楽しみとする。詩というものも、人間世界にとって、ちょうど花が陽春に咲くかのようなもので、色とりどりにきらきらとして、この文明を彩っているわけである。作者がまず楽しみ、読者も楽しむというわけだ。しかし、実際に役立つかどうかという観点から論じると、春の花が爛漫と咲くのは、秋の果実がたわわに実るのには及ばない。詩の、人間の諸事に対する関係も同様である。昔の人には、詩に修身斉家平天下の道を求めるものがいたが、私は賛成しない。

同郷人の平賀静遠、勝田睡仙は、この頃愛好家の詩歌を編集して、風月小誌と名付けた。その第三巻が完成して、私に一言を求めた。私は辞退したのだが許されず、しょうがなく受諾して評を付けた。評は以下の通り。本号の詩は、華麗で艶っぽいものは牡丹や海棠の花のようであり、冷ややかで高踏的なものは白梅や青い李の花のようだ。そのほか、杏子や桃や芍薬や沈丁花の如きものもある。どれも鑑賞するに値する。そして、その幾千万の紫や紅の花の爛漫と咲くことは、陽春に限らず、四季それぞれ芳香が絶えることはない。とすれば、作者の楽しみはもちろんだが、読者の楽しみも言うまでもない。これ以上何の評を加えることができようか。愛山高橋基一が東京赤坂の百花書

屋でしるした。

【注釈】千紫万紅―辛棄疾・水龍吟「人間意を得たるは、千紅万紫にして、転頭すれば春尽く」。　斐然―模様があって美しいさま。論語・公冶長「我が党の小子狂簡、斐然として章を成す」。　粲然―あきらかなさま。荀子・非相「聖王の（之）迹を観んことを欲すれば、則ち其の粲然なる者に於いてす矣。後王是れ也」。　以装斯文―斯文は文明の伝統、学問。論語・子罕「天の（之）将に斯文を喪ぼさんとする也」。装斯文は口語では、上品ぶることをいう。わざと用いたか。装と粧は、完全な同音（通用の日本漢字音は漢音、呉音の違い）。　爛熳―爛漫に同じ。色どり鮮やかに光り輝くさま。特に春の花が繁茂するさまに用いられる。王延寿・魯霊光殿賦「流離爛漫」。陳子昂・大周受命頌「叢芳爛漫」。　穣々―実り多いさま。詩経・商頌・烈祖「豊年穣穣」。　修身斉家平天下之道―礼記・大学による。修身斉家治国平天下。とりあえず、藩がなくなった現状に合わせて、治国を省いたか。天下は日本国ということになろう。　不取―良い案として採用しない。史記・項羽本紀「窃かに大王の為に取らざる也」。　郷人平賀静遠―既出。勝田睡仙―既出。　綺麗―飾り立てた華麗なさま。後の牡丹にあたるであろう。曹丕・善哉行一「綺麗忘れ難し」。　嬌艶―女性的ななよなよとしてあでやかなさま。後の海棠にあたるであろう。　海棠―ハナカイドウ。バラ科。中国原産。秋海棠は別種。釈恵洪・冷斎夜話所載の、玄宗が酔った楊貴妃を「直だ海棠睡ること未だ足らざる耳」といった故事が有名。　素梅―白梅。王冕の素梅詩五十八首が有名。　碧李―杜甫・問を解く十一「翠瓜碧李玉甃に沈む」。熟さぬすももをいうであろう。　瑞香―沈丁花の漢名。　愛山高橋基一―既出。

序

月のむしろ、花の本、あるは折にふれ事に臨みて、うたひいて思ひをのぶるは、唐にやまとにいく千万とあれど、人毎にしらべかはり、巻ことにすかたひとしからす。けにやそのおもての如く、同じからぬ人のこゝろを種なる言の葉なれは、さる理にやあらむ。更にまた空蟬のよのうつりゆくまに〳〵、人の心のおもむく所もつかの木のいや継々にあらたなるをや。されは古今にわたりて歌ふみてふもの、濱の真砂のかすしけゝれと、つひに尽せぬもの

には有けらし。今この風月のふみなりそめて、早早三まきになりぬ。猶いやしきによる浪の、間なく時なく、からにしき倭錦のあやおりて、目をよろこばしめ、心を慰めむものそと、まち楽むものは、桃李園の老夫長年。

【大意】月をめでるうたげ、桜の咲く下での連歌の会、あるいは折々の行事で、歌を唱って思いをのべるのは、中国でも日本でも幾千万と行われているが、人それぞれ調子が違い、本それぞれ表現が様々である。まことに、人間の顔のように、それぞれ違う人間の心をもととした言葉であるから、そういう道理になるのであろうか。まして、セミの殻のようにむなしい世の中で移り行くまま、人の心も栂の木の芽のように、次々と新たな展開をむかえるのだから、なおさらだ。そういうわけで、昔から今に至るまで、歌や文章というものは、浜の真砂のように数が多いが、結局は尽きないものであるらしいことよ。今、この風月小誌という雑誌が始まってより、はやくも三号となった。あたかも、次から次へとよせる波のように、間断なく続いて、中国や日本の錦が複雑な文様を織りだすのと同様に、中国や日本の修辞を尽くした文章は、我々の目を楽しませ、心を慰めてくれるはずであろうと、待ち望んでいるものは、わたくし桃李園の老夫長年（年長の誤り）でござる。

【注釈】月のむしろ―月見をしながら催す歌会。歌語の「つきのさむしろ（月の光がさむざむとさしこんでくるしとね）」が措辞の念頭にあるか。拾遺愚草員外「やどからにせみのはごろも秋やたつかぜのたまくら月のさむしろ」。花の本―桜の木の根元で、花見をしながら催す宴会。「花の本連歌（鎌倉・南北朝時代に、庶民が寺社の桜の木の下で興行した連歌の会）」が念頭にあるか。　そのおもての如く、同じからぬ人のこゝろを―左伝・襄公三十一年「人心の同じからざるは、其の面の如し焉」。　種なる言の葉なれは―古今集・仮名序「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」。　空蝉のよの―本来は現世の意だが、空蝉の表記にひかれて、平安期より仏教的な無常ではかない世の意を帯びるようになった。古今集「うつせみの世にもにたるか花ざくらさくとみしまにかつちりにけり」。　つかの木のいや継々に―既出。　濱の真砂の―浜辺の砂。数が多くて数えきれないところから、無数・無限であることのたとえにいう。古今集・仮名序「山したみづのたえず、はまのまさごの、かずおほくつもりぬれば」を意識する。　いやしきによる浪の―いやしきは動詞しく（頻）の連用形に副詞いやが付いて、一語となり、い

よいよしきりに起こるさまをいう。長能「いやしきになみうちこすとみえつるはきしの桜のかげにぞありける」。間なく時なく―古今集「しもとゆふ葛城山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかな」。　からにしき倭錦―漢詩と和歌を暗示する。またからにしきはおり（織り、折）の枕詞、縁語。為忠「宵ごとに人に知られで唐錦折だによくば誰かあやめむ」。　あやおりて―寛平御時后宮歌合「水の上に綾織見たる春雨や山の緑をなべて染むらむ」。　桃李園の老夫長年―長年は年長のあやまり。増田年長は既出。

風月小誌第三号

1辛未季夏。於二東京客寓一作二一絶句一。贈二平賀静遠一。　寛堂　松平直応

知君誠意自通レ神。積歳幽冤忽得レ伸。世上浮沈何用レ問。后天必竟護二端人一。

老雨云。静遠之受レ冤。在二竹腰侯之邸一。侯愛顧不レ措。以二公冶長一比レ之。居三年。乾旋坤転。事皆氷釈得二放帰一。此詩之寄正在二其時一。人孰無レ冤。如二静遠一冤之尤甚者。而今俯仰不レ恥。優遊以卒レ歳。豈不二亦聖代之沢一哉。余於二此事一非下無レ所二関係一者上。読二此詩一憮然久レ之。【両侯字もと候に作る。今改む】

【訓読】辛未季夏。東京客寓に於いて一絶句を作り、平賀静遠に贈る。　寛堂　松平直応

知る君誠意自ら神に通ず。積歳幽冤忽ち伸ぶるを得たり。世上の浮沈何ぞ問うを用いん。后天必竟端人を護らん。

老雨云う。静遠の（之）冤を受くるは、竹腰侯の（之）邸に在り。侯愛顧して措かず（不）。公冶長を以て之に比す。居ること三年、乾旋り坤転じ、事皆氷釈して放帰を得たり。此の詩の（之）寄するは正に其の時に在り。人孰か冤無からんも、静遠の如きは冤の（之）尤も甚だしき者、而して今俯仰して恥じず（不）、優遊して以て歳を卒う。豈に亦た聖代の（之）沢ならず（不）哉。余此の事に於いて関係する所無き者に非ず。此の詩を読んで憮然として之を久しうす。

【大意】（一八七一年（明治四年）夏の終わり、東京の旅先で絶句を作り、平賀静遠に贈る詩）。あなたの誠意が当然

のこととして神に通じて、長年のあなたの無実の罪の苦しみが解決した。世の中の浮き沈みなど気にする必要はない。天は結局正しい人を加護するのだ。

雨森精翁の評。静遠が無実の罪に陥れられたのは、竹腰様の屋敷にとどめおかれていた時であった。竹腰様は静遠を愛してやまず、孔子の弟子の公冶長―獄中にあった彼は冤罪であるとして、孔子が娘をやったという―になぞらえた。三年たって、世界に大転換が起こり、冤罪はすべて解決して釈放帰郷を許された。この詩を松平直応様が人を介して贈られたのは正にこの時であった。人間、無実の罪に陥ること誰しもあるものの、静遠の場合は冤罪の最たるものだ。今や天地のどこを向いても何ら恥じるところがなく、ゆったりと年年を暮らしている。これまた、現天皇のしろしめす御代のおかげではないか。私は実はこの事件に関係がないとはいえなかった。しばらくの間、これまでのことを思い返して、呆然としたのであった。

【注釈】辛未―かのとひつじ。明治四年。　季夏―旧暦九月。　東京―すでに遷都して、東京の名が定着。ただし、とうけいと呼ぶ場合が多かった。　客寓―外地での宿泊場所。おそらく松江藩藩邸（上屋敷）かその周囲の旧藩関係の建物であろう。　平賀静遠―既出。本書の編集者。所蔵していた直応のこの絶句を提供したのであろう。幕末慶應四年隠岐騒動に於いて、事態収拾にあたったが、その際の監督不行き届きをとがめられ、京都で取り調べられる。京都の竹腰邸に預けられたのはこの時期。藩の要求にもかかわらず、なかなか審査は進まなかった。また、家老としての縫殿の名を廃し、半助に改める。やがて東京に身柄を移され、明治四年ようやく無罪放免、帰郷許可（『松江市史』等による）。以後、詩作に精を出す。明治十六年没。年七十。　寛堂松平直応―寛堂公子。名は直応。直指公（九代藩主斉貴）の第二子也。幼くして頴悟。東京に遊学して、西籍に通ず。明治四十四年没す。年五十七也（『出雲詩綜』）。第十代藩主定安（斉貴の婿）の養子となる。明治初年、廃藩置県後もなお松江に滞在していた。詩はこの時期のものであろう。明治五年、定保の隠居により、家督相続。やがて精神不安定とスキャンダルにより、明治十年定保に家督を返還、隠居。　通神―神に気持ちが通じる。王延寿・魯霊光殿賦「夫の通神の（之）俊才に非ずんば、誰か能く此の勲を（乎）剋成せん」。　積歳幽冤―無実の罪で、人に知られぬまま苦しむこと。崔湜・景龍二年春日襄

陽に赴く途中志を言う「幽冤終いに明らかにせ見る」。　世上浮沈―呂巌・世間の万種浮沈の事、理に達するは誰か能く我が家に似る」。　后天―最高の天。見慣れぬ語だが、おそらく天の意味の后帝をもとにして、平仄を整えた。詩・魯頌・閟宮「皇皇たる后帝」。鄭玄箋「皇皇たる后帝は天を謂う也」。　必竟―結局は。畢竟に同じ。必然的にの気持ちがあろう。賈島・孟郊に投ず「必竟実とする所を獲」。　端人―正しい人。孟子・離婁「夫の尹公之他は端人也」。　竹腰侯之邸―竹腰正旧（たけのこしまさもと。一八五一～一九一〇）。竹腰家は名古屋藩主徳川家の付家老だった家だが、明治元年に美濃国今尾藩を維新立藩することが認められる。明治二年、版籍奉還、藩知事に。明治四年、廃藩置県で免官、東京へ。ちなみにこの時、行を共にした家令中勘弥は、中勘助の父である。静遠は隠岐騒動（一八六八）における監督不行き届きで、京都で尋問されたので、この邸は、京都の竹腰の屋敷であるらしい。その後、静遠は東京に身柄を移され、明治四年やっと無罪放免になる。　愛顧―楊脩・臨淄侯に答うる書「豈に愛顧の隆んなるに由り、係仰の情をして深からしむるか」。中国ではあまり用いない語のようである。　不措―措は、そのままにしておくこと。放置。禮記・中庸「学ば弗ること有れば、之を学びて能くせ弗れば措か弗る也」。　公冶長―孔子の弟子。公冶長は牢屋に入れられたが、本人の罪ではないとして、孔子は公冶長に自分の娘を嫁がせたという。論語・公冶長「子、公冶長を謂う、妻あわす可きなり。縲絏の中に在りと雖も、其の罪に非ざるなり、と。其の子を以て之に妻あわす」。　居三年―前述。　乾旋坤転―白居易・長恨歌「天旋地転龍馭を廻らす」。　氷釈―老子「渙として兮氷の将に釈けんとするが若し」。　放帰―解放して帰させること。放ちて帰す。宋之問・広州朱長史の座に妓を観る「神仙放帰する莫れ」。　寄―直接ではなく、人にことづけて与える。　人孰無冤―左伝・宣公二年「人誰か過ち無からん」。　尤甚―李密・陳情表「況んや臣は孤苦にして特に尤も甚しと為すをや」。　而今―この二字で熟語化して、じこんと訓ずる場合も多い。　俯仰不恥―孟子・尽心上「仰いで天に愧じず、俯して人に怍じざるは、二楽也」。　優遊以卒歳―左伝・襄公二十一年「詩に曰く、優なる哉遊なる哉、聊か以て歳を卒う」。嵇康・四言詩其一「悠遊として歳を卒う」。　聖代―現天皇治世の時代。当代をいう。陸雲・晋故豫章内史夏府君誄「熙光たる聖代」。　沢―恩沢。恩恵。めぐみ。　非無所関係者―雨森精翁が松江藩の外交役として、隠岐騒動等、維新前後の藩政混乱の収

拾のため、諸方と様々な交渉をしたことをさすと思われる。　憮然―論語微子「夫子憮然として曰く」。失意のさまと旧来解釈されるが、茫然自失の意もあろう。

2辞レ官帰レ郷。留二別松江諸子一。　櫟村閑士　佐藤氏　周防熊毛郡人

自負秋風張翰興。鱸肥時節去二松江一。欲レ酬二清世一無レ如レ老。休レ道見レ機辞二異邦一。

老雨云。真是県令詩。三四君子言。

【訓読】官を辞して郷に帰る。松江の諸子に留別す。　櫟村閑士　佐藤氏　周防熊毛郡の人

自ら負く秋風張翰の興。鱸肥ゆる時節に松江を去る。清世に酬いんと欲するも老いを如んともする無し。道うを休めよ機を見て異邦を辞すと。

老雨云う。真に是れ県令の詩。三四は君子の言。

【大意】（役人をやめて帰郷する。松江の親友たちに残す詩）スズキの味がなつかしくて秋風にさそわれるまま故郷松江（しょうこう）に帰ったという張翰、その興趣とは真反対の選択を勝手にした私。松江（まつえ）名物のスズキが脂ののった折も折に松江を去ることになるとは。維新後の清らかで平和な時代に恩恵を被ったのだから、なんとかご恩返しをしたいと思っていたのに、老いはいかんともしがたい。処世で機を見るに敏だから、張翰のようにこの機会に乗じて、他国である島根県を去って故郷の山口県に帰ったんだとか思わないで下さいよ。

雨森精翁の評。本当に県知事にふさわしい詩。後半は、立派な君子のことばである。

【注釈】佐藤櫟村―佐藤信寛（一八一六～一九〇〇）。長州藩藩士。明治維新後には浜田県権知事、島根県令などを務めた。明治十一年退官、帰郷。岸信介、佐藤栄作首相の曽祖父。　周防熊毛郡―現山口県熊毛郡田布施町を中心とする。律令以来の郡。明治十二年、郡区町村編制法の施行により行政区画としての熊毛郡が発足。　自負秋風張翰興―晋の文人張翰は、内乱（八王の乱）直前、秋風が吹くのを見て、故郷の料理である蓴羹や鱸膾を懐かしんで、官を辞して帰郷した。時の人は機を見るに敏であると言った。晋書・文苑伝「翰は因りて秋風の起つを見て、乃呉中の菰

菜、蓴羹、鱸魚膾を思う。曰く、人生適志を得るを貴しとす。何ぞ能く羈宦數千里以て名爵を要せん乎、と。遂いに駕を命じて（而）帰る。首丘賦を表す。文多ければ載せず（不）。俄かにして（而）冏敗る。人は皆之を機を見ると謂う」。　鱸肥時節去松江―鱸は中国松江の特産であるとともに、この松江の特産でもある（但し、同字別種）。よりによって、そのおいしい季節の秋に、松江を去る。地名と魚名の一致を利用して、張翰と逆の境遇であることを訴える。　清世―清潔で平安な世。その恩恵を受けて、平穏無事に暮らすことができた。　無如老―無如は無如之何（之を如何ともする無し）を省略した言い方。劉長卿・崔九載華に送る「歳歳老い去るを如何ともする無し」。　見機―先述の張翰の伝にもあった語。周易・繫辞下「君子は機を見て而して作す、日を終わるを俟たず（不）」。　辞異邦―論語・季氏「異邦人は之を称して亦た君夫人と曰う」。　県令―明治四年から十九年までの県の長官の呼び名。同一九年の地方官制公布により知事と改称される。県知事にあたる漢語を用いた。彭沢県令を辞めて故郷に帰った陶淵明を意識するか（『帰去来の辞序』）。　君子言―盧綸・東潭の宴にて河南趙少府に餞けす「日に聞く君子の言」。

3首夏山居。分レ韻得レ魚。　笠東　森山氏　出雲松江人　住西京

満山新翠雨晴初。長昼如レ年倦レ読レ書。童子時携二香餌一去。落花漲処釣二渓魚一。【釣字下もとレ点。今一二点に改む】

渡部竹園云。有趣。

【訓読】首夏山居。韻を分けて魚を得たり。

満山の新翠雨晴るる初め、長昼年の如し書を読むに倦む。童子時に香餌を携えて去り、落花漲る処に渓魚を釣る。

渡部竹園云う。趣有り。

【大意】（初夏の山住まい。詩会の韻のくじで魚の韻が当たった）新緑は雨が上がるや山いっぱいに広がり、長い昼間が一年間のようで、本も読み飽きた。ちょうどその時、子供がエサを持ってきたので、落花が水面いっぱいに広がった谷で釣りをしてみる。

渡部竹園評。趣深い。

【注釈】首夏―初夏。旧暦四月。謝霊運・赤石に遊び帆を海に進む「首夏猶お清和たり」。　山居―山に住むこと、また、山の住み家。謝霊運・山居賦序「棟宇山に居るを山居と曰う」。　分韻―詩会で韻のくじを引き、その韻に合わせて作詩すること。　得魚―上平六魚（平水韻）のくじが当たった。　森山笠東―不明。　出雲松江人住西京―明治維新後東京（江戸）に対して京都をいう。東京は漢音でトウケイの読みが当初優勢であったが、西京はサイキョウと呉音で呼ばれていたようである。　新翠―新緑と同じ。宋之問・龍門応制「河堤柳は新たに翠なり」。　雨晴初―韓偓・村居「二月三月雨晴るる初め」。　長昼如年―朱晞顔・過秦楼　客中端午「奈かんともする無し長昼年の如きを」。　倦読書―王行・春江釣艇図「春日初めて長く書を読むに倦む」。　携香餌去―杜甫・顧八分文学の洪吉州に適くを送る「童子時に香餌を携えて去る」。　漲―水がわきおこり、みなぎりみちること。六朝期より使われる。ここは、落花が水面にあふれかえっているさまをいうのであろう。　釣渓魚―杜荀鶴・仇処士郊居に題す「時に渓魚を釣って鶴を引いて争う」。　有趣―王融・芳樹「喧風多く趣き有り」。

4 秋夜宿二山寺一　三翠　小川氏　名善淵　字深卿　出雲松江人

寂寞山房夢自空。一声鳴鹿月明中。題レ詩欲レ借二仏前燭一。吹滅蕭々窓隙風。

竹園云。幽峭。

【訓読】秋夜山寺に宿す。　三翠　小川氏　名は善淵　字は深卿　出雲松江の人

寂寞たる山房夢自ら空し。一声の鳴鹿月明の中。詩を題し仏前の燭を借りんことを欲す。吹滅す蕭々たる窓隙の風。

竹園云う。幽峭たり。

【大意】（秋の夜山寺に宿泊する）さびしい山寺では、夢も楽しいものではない。鹿の鳴き声が月明りの中で響いた。さて、詩でも書こうかと仏前の蠟燭を借りようとしたところ、窓の隙間から、風が吹いてきて、消えてしまった。

渡部竹園評。人里離れてそびえたつ静かな寺（そして、そのような風格の詩）。

【注釈】小川善淵―未調査。自由民権運動や弁護士業務（代言人）、小学校教育（校長）に関わった人。よしぶちと読むか。　寂寞山房―山中の寺。温庭筠・白蓋峰寺に宿して僧に寄す「山房霜気晴る」。　一声鳴鹿―詩・小雅・鹿鳴「呦呦たる鹿鳴、野の（之）萍を食らう」による。この句が、友を求めて鳴くと解釈されたのにより、以後孤独の象徴となった。韓愈・張徹に答う「萍甘きことは鳴鹿に謝す」。　月明―本来は月が明るい意だが、月光そのものを指すようになった。白居易・舟中に夜坐す「夜深くして相い伴う月明の中」。　吹滅―呂巌・白龍洞劉道人に寄す「燭をして風に吹滅せ被れ教むる莫れ」。　蕭々―様々な音をあらわす擬音語だが、ここは風の音。陶淵明・荆軻を詠む「蕭蕭たる哀風逝く」。劉禹錫・秋風引「何れの処よりか秋風至り、蕭蕭として雁群を送る」。　窓隙風―蘇轍・王適の雪晴れて復た雪ふるに次韻す其一「晨に興きて窓隙を視る」。楊万里・二月一日雨寒「窓隙の小風能く幾許ぞ」。幽峭―幽はひそかで暗く、人のいないさま。峭はけわしい。主に地形についていうが、ここではこの詩の風格自体に言及しているのかもしれない。王世貞・後五子篇其一「山骨幽峭を露わにす」。

5 雨窓読書　　半村　飯島氏　出雲松江人

春到二庭梅一清有レ餘。煙籠二園柳一眼先舒。鳥声寂々無二人訪一。細雨幽窓独読レ書。

老雨云。結句得二漁洋髓一。○勉斎云。若レ個閑況難下向二風塵一説上。

【訓読】雨窓読書。　半村　飯島氏　出雲松江の人

春は庭梅に到って清くして餘り有り。煙は園柳を籠めて眼は先ず舒ぶ。鳥声寂々人の訪う無く、細雨の幽窓独り書を読む。

老雨云う。結句は漁洋の髄を得たり。○勉斎云う。個くの若き閑況は風塵に向かって説き難し。

【大意】（雨の降る窓のそばで読書をする）庭の梅に春がやってきて花の香りの清らかさが十二分に漂ってくる。もやが園の柳にかかって、若芽が他に先駆けて伸びようとしている。鳥の声が静かに響くが誰も訪れぬ。粉糠雨のふる静かな窓辺で一人書を読む。

雨森精翁評。末の句は、王漁洋の精髄を得た作りだ。山村勉斎評。このような静かな有様は、俗塵に満ちた世間の人には、わからないだろう。

【注釈】雨窓―韓偓・灯を詠む「長門に向かって雨窓に背くを休めよ」。　飯島半村―名は興起。松江の人（『出雲詩綜』）。　庭梅―高紹・晦日高氏の林亭に宴す「庭梅早花を落とす」。　清有餘―姚鵠・許璋少府に寄贈す「文才清くして餘り有り」。　煙籠―王勃「碧瓦煙は翠を籠む」。　園柳―謝霊運・池上の楼に登る「池塘春草を生じ、園柳鳴禽に変ず」。　眼―柳眼。柳の新芽。眠そうな目が開こうとしている感じ。元稹・生春「春枝条に入って柳眼低る」。　先舒―丸く固まった芽がのびて展開する。呂従慶・渓西村「緑の際茗は芽を舒ぶ」。　寂々―孤独な感じ。直接には鳥声を形容するが、周りの庭や家全体の雰囲気をも示す。　細雨―小雨に同じ。春にふさわしい。王倹・春二首其一「細雨は叢枝を乱す」。　幽窓―張泌・春夕懐いを言う「幽窓謾りに結ぶ相思の夢」。　得漁洋髄―漁洋は王士禎（一六三四～一七一一）の号。清代初期の文人・詩人。神韻説の主唱者と目される。平静、禅味を理想とし、文字では直接表現できない情味を行間に漂わせる作風。漁洋の髄の意もこのあたりであろうか。髄が達磨の皮肉骨髄の語を意識するならば、この評自体禅味を帯びた語といえよう。景徳伝燈録・達磨「汝（慧可）は吾が髄を得たり」。　○若個―本来はどれ、どれほどの意の疑問詞。東方虬・春雪「知らず（不）園裏の樹、若箇（いずれ）か是れ真梅なるを」。ここは、似個（かくのごとし、このように）と混乱しているようである。李白・秋浦歌「白髪三千丈、愁いに縁りて個くの似く長し」。　閑況―のんびり（悠閑）とした静かさ（閑静）。　風塵―世俗。高適・封丘作「寧ぞ堪えん吏と作る風塵の下」。

6 避暑六言　　重教散人　金本氏　名重教　字子典　出雲神門郡人

柳逕環レ崖左右。板橋跨レ水西東。茸々緑葉遮レ日。冉々漣漪送レ風。

竹園云。涼意可レ掬。

【訓読】避暑六言（ひしょろくごん）　重教散人（ちょうきょうさんじん）　金本氏（かなもとし）　名は重教（なちょうきょう）　字は子典（あざなしてん）　出雲神門郡の人（いずもかんどぐんひと）

柳逕は崖を環って左右し、板橋は水を跨って西東す。茸々たる緑葉は日を遮り、冉々たる漣漪は風を送る。竹園云う。涼意掬す可し。

【大意】（避暑六言絶句）柳陰になった道は岸辺の崖を巡って左に右に通じ、板橋はそれと垂直に水を超えて東西方向にある。鬱蒼と茂った柳の緑の葉が日光を遮り、のんびりと流れゆくさざ波から風が吹いてくる（のに心動かされる）。

渡部竹園評。涼しさが手に取るようにわかる詩だ。

【注釈】避暑―班固・竹扇「来風は避暑に堪ゆ」。　六言―一句六字よりなる詩。主に絶句（四句）。劉勰・文心雕龍・章句「六言七言、詩騒雑出す」等、起源については諸説があるが、中国日本とも、後世では、王維の「桃は紅にして復た宿雨を含み、柳は緑にして更に朝煙を帯ぶ。花落ちて家童未だ掃わず、鶯啼ないて山客猶お眠る」が典型とされているようであり、この作も全句対、平仄や自然描写等に於いておそらく意識する。　重教散人金本氏名重教字子典―金本相観（摩斎）『楽山堂詩抄』の編集者で、金本相観の弟。金本摩斎（一八二九～一八七一）は幕末の儒者。出雲神門郡人。尊王攘夷論を唱えた。明治二年の横井小楠暗殺事件で、禁固刑、明治四年獄死。名は相観。字は善郷。通称は顕蔵。別号に椒園（講談社『日本人名辞典』）。　神門郡―現出雲市西部と大田市の一部。古代からの郡であるが、明治十二年郡区町村編制法により行政区画としての神門郡が発足。二十九年、郡制により簸川郡に編入。　柳逕―逕は径に同じ。虞綽・婺州に於いて囚せ被る「柳径秋風起こる」。　環崖左右―このあたり、どのような地理配置か、わかりにくいが、神門郡の名勝立久恵峡を思い浮かべて訳した。　板橋―有名な南京の色町など、地名によく用いられるが、ここは板製の粗末な臨時的な橋をいうのであろう。水滸伝・第五回「一条の板橋を過ぎ了んぬ」。　跨水―韋荘・李氏小池亭十二韻「小橋低く水を跨る」　茸々―草がうっそうと茂っているさま。皇甫湜・春心「草茸茸として兮既に長ず」。　緑葉―楚辞・九歌其六少司命「緑葉兮素枝」。　遮日―司空図・力めて疾す、馬上筆を走らす「垂柳且つは晴れて日を遮る為にせん」。　冉々―しだいに進んでいくさま。楚辞・離騒「老いて冉冉たる其れ将に至らん兮」。　漣漪―風に吹かれて水面に生じる波紋。人の心の小さな動きのたとえによく用いられる。詩経・魏風・

伐檀「河水清くして且つ漣漪」。　送風―賈島・子規「憂うる処風を送ること頻りなり」。　竹園―渡部竹園、既出。
　涼意―清涼な感じ。孔平仲・霽夜「（秋風は）独り涼意を以て流螢に伴わしむ」。　可掬―水を手でくみ取れる。転じて、はっきりと、まざまざと理解、確認すること。韓愈・春雪「階に徧くして憐れなること掬す可し」。韓滉に「雨を聞く　涼意掬す可し」の詩題あり。

7 挿レ梅　　恥斎山本氏　名堅　字子固　出雲神門郡人

胆缾貯レ水挿二梅花一。第一寒香占二歳華一。不レ羨孤山千万樹。愛看疎影小横斜。

老雨云。安レ分語。

【訓読】梅を挿す　　恥斎山本氏　名は堅　字は子固　出雲神門郡の人

胆缾水を貯めて梅花を挿す。第一の寒香歳華を占む。羨まず（不）孤山千万の樹。愛して看る疎影小しく横斜するを。

　老雨云う。分に安んずる語。

【大意】（梅を花瓶にさす）花瓶に水を注いで梅花をさす。梅は、最初に、最高の清冽な香りを放つ花として、四季の花の中で最高位に位置する。西湖孤山の何千万の梅の木などうらやましくない。ただただまばらな樹影がわずかに傾いたさまをめで続けるのである。

　雨森精翁の評。自らの運命や境遇に満足している言葉である。

【注釈】山本恥斎―不明。　胆缾―くびの細長い徳利状の花瓶。宋代よりはやり、詩詞に詠まれる。楊無咎・点絳唇「小閣は清幽、胆瓶高く挿す梅千朶」。　第一―一番最初と最高の両意を兼ねるであろう。　寒香―清冽なかおり。特に梅の香りを指す。羅隠・梅花「静かに愛す寒香の酒樽を撲するを」。　占歳華―陸游・雨夜「百紫千紅占歳華」。歳華は、一年の意。花に対するたとえもあろう。春の意ともとれる。　孤山―中国浙江省杭州の西湖の中にある島の名。梅を愛した隠者林逋が住んでいた。それがきっかけになったか、それよりも前からか、詳らかではないが、現在

は何百本もの梅林がある。　愛看疎影小横斜―林逋・山園小梅「疏影は横斜し水は清浅」を用いた。范成大・至昌具を為して東軒千葉梅を賞するも、然れども梅は尚お未だ開かず「新たに竹外に移せば小しく横斜す」。　安分―白居易・拙を詠ず「此を以て自ら分に安んず」。

8訪二伯州米子法蔵寺一席上望二大仙山一　原知敏　出雲松江人　住陸中

来尋二盟約一叩二禅関一。香影茶声脱二世寰一。坐愛此居風景大。小窓自在見二仙山一。

竹園云。不レ用二修飾一自然成レ詩。

【訓読】伯州米子法蔵寺を訪ぬ。席上大仙山を望む。　原知敏　出雲松江の人　陸中に住す

来りて盟約を尋ね禅関を叩く。香影の茶声世寰を脱す。坐ろに愛す此の居風景大なるを。小窓より自在に仙山を見る。

竹園云う。修飾を用いず、自然と詩に成る。

【大意】（伯耆の国米子法蔵寺を訪れ、会合の部屋から大山を眺める）法縁を求めて禅寺の門をたたく。花の影で茶を沸かす音がして、世俗を超脱した気分。ボーとしてこの部屋からの風景の雄大さを好ましく眺める。小さな窓から、心行くまで、仙気に満ちた大山をみることができる。

渡部竹園のことば。レトリックに凝らずに、そのままの描写で詩ができた。

【注釈】伯州―伯耆の国。　米子法蔵寺―米子寺町に現存。曹洞宗。　大仙山―大山の古くからの別名。思うに、だいせんの呉音読みが定着したのちに、あてられたのではないか。　原知敏―不明。　陸中―戊辰戦争後に陸奥国を分割した地方区分。ほぼ岩手県に当る。戊辰戦争に参加したのち、岩手県に定住した藩士か。　尋盟約―左伝・哀公十二年「必ず盟を尋す」。杜注「尋は重なり」。また、あたためる（燖）の解釈もある。以前の誓いをもう一度し直して固める。再会を期する意か。　盟約―周礼・秋官・大司寇「凡そ邦の（之）大盟約は、其の盟書に涖んで之を天府に（於）登す」。ここでは、仏に帰依する素志のことか。　叩禅関―禅関は禅寺の門、引いて禅寺自体、さらに禅宗

に入信すること。李白・化城寺大鐘銘「禅関に入るに方りて」。許渾・将に京に赴かんとして僧院に留贈す「帰り来たって依止して禅関を叩かん」。　香影―詩では、梅の香りを指すことが多いが、ここは寺の香炉からの香り、またはその煙の影であろう。斉己・永夜「香影は龕象に浮かぶ」　茶声―寺などで茶を煮る音。　世寰―俗世。人寰、塵寰に同じ。劉学箕・賀新郎　再韻賦雪「世寰恍惚として山川別なり」。　坐愛―坐は坐ったまま何も動かぬことから、ぼーとしてのニュアンス。明白な理由がないこと。杜牧・山行「車を停めて坐ろに愛す楓林の晩」。　自在―束縛なく自由に、勝手気ままに。杜甫・江畔独歩して花を尋ぬ「自在の嬌鶯恰恰として啼く」。

9 江上春望　　呉淞　稲田氏　出雲広瀬人

長江寥濶夕陽紅。春在二綺羅飄瞥中一。楼上美人遮不レ得。疎簾吹颺柳絲風。

阪本蘭窓云。艶麗。結妙甚。○竹園云。婉麗。使三人自動二遊春之情一。

【訓読】江上の春望　呉淞　稲田氏　出雲広瀬の人

長江は寥濶として夕陽は紅なり。春は綺羅飄瞥中に在り。楼上の美人遮り得ず（不）。疎簾吹き颺げらる柳絲の風。

阪本蘭窓云う。艶麗たり。結は妙なること甚だし。○竹園云う。婉麗たり。人をして自ら遊春の（之）情を動かす。

【大意】（川岸の春景）長く続く川は広々していて夕陽はあかあかと。春はこの美しい織物のような景色がきらめく中にこそある。二階の女性は人目を避けられずにその姿をさらしてしまった。すだれが柳を吹く風に吹き上げられたのだ。

阪本蘭窓評。艶やかで美しい描写。結句のすばらしさは大したもの。○渡部竹園評。女性的なやわらかい美しさ。春に自分も出かけて遊びたい気持ちにさせる。

【注釈】稲田呉淞―不詳。　長江―中国の長江ではなく、長い川。江、長江は、中国でも長江（およびその支流）に

限らない。広瀬、安来を通って、中海に注ぐ飯梨川（別名富田川）と思われる。　寥濶―（見る者が寂寥を感じるほどに）広々として大きいさま。杜甫・秦州敕目を見るに、薛璩畢曜遷官す。三十韻「大雅何ぞ寥濶たる」。　春在―蘇軾・題を刁景純藏春塢に寄す「春は在り先生杖屨の中」。　綺羅―色どり鮮やかな布、服、またそれを着た女性。ここでは春の景色にたとえる。　飄瞥―本来は、雪や花がちらほら風に舞う様。ここでは、瞥に引かれて、一瞬ちらっと見えるような意味で用いているのかもしれない。劉義慶・世説新語・言語「郊邑正に自ら飄瞥」。　楼上美人―馬逢・宮詞二首其一「楼上美人相倚りて看る、紅粧透出す水晶の簾」。妓楼の部屋にたたずむ妓女であろう。　遮不得―元稹・楽府古題序（丁酉）其二古筑城曲五解「城有るも遮り得ず（不）」。　疎簾―間が透いている竹簾。杜甫・晩晴「江色疎簾に映ず」。　吹颺―陶淵明・帰去来の辞「舟は遙遙として以て輕颺し、風は飄飄として（兮）衣を吹く」。劉孝威・行行且遊猟篇「風清くして鐃吹き颺げらる」。梁希声・浣渓沙　清明「暖風吹颺して薄羅軽し」。　柳絲風―柳絲は柳の枝を糸にたとえる。李白・下途石門旧居に帰る「暮れに向う春風楊柳の糸」。　阪本蘭窓―既出。　艶麗―表面に現れる輝くような美しさ。曹植・閨情一「妖姿艶麗なり」。　婉麗―温柔婉約。なよやかな美しさ。晋書・列女傳・段豊の妻慕容氏伝「慕容氏姿容婉麗たり」。

10春遊　　復軒　三刀氏　仝所人。

寄二迹浮雲一都自在。只須三携一酒酔二煙霞一。富堤晴景月山雨。探遍春村処々花。

老雨云。筆亦自在。

【訓読】春遊　　復軒　三刀氏　仝所の人

迹を浮雲に寄せて都て自在なり。只だ須く酒を携えて煙霞に酔うべし。富堤の晴景月山の雨。探ること遍し春村処々の花。

老雨云う。筆も亦た自在。

【大意】（春の散歩）浮雲に身を任せるように、自由自在に歩き回る。酒をもってきて霞の中でただただ酔うべきで

ある。富田川の堤の晴れた景色もいいし、月山に雨が降るのも一興。春の村々のいたるところに咲く花を残るくまなく見たことだ。

雨森精翁評。詩の中で自在に逍遥することを述べているが、作者自身の筆致も自由自在である。

【注釈】春遊―春、外出して遊ぶこと。白居易・長恨歌「春は春遊に従い夜は夜を専らにす」。　三刀復軒―不明。広瀬藩医で詩を能くした三刀舜朗の縁者か。三刀舜朗、字は巨川、号は雪卿、頓原の人。横山青藍に学びて易を究む。後に従いて菅茶山・後藤栗庵・頼山陽等に学び、医を以て広瀬藩に仕う。嘉永七年没す。年六十四（横山耐雪『出雲詩綜』）。　寄迹―陶淵明・子に命く「迹を風雲に寄す」。　浮雲―無常迅速の気持ちを込めるであろう。自在の気持ちも。韋応物・淮上梁州の故人に会うを喜ぶ「浮雲一別の後、流水十年間」。　都自在―自在は拘束を受けずに楽しく過ごすさま。都とともに口語的。そして、この表現自体が自在。　只須携酒酔煙霞―煙霞は美しい山水。呉子来・観中に留まる「時時酒を買って煙霞に酔う」。　富堤―富田川の堤。　月山―富田川そばにそびえたつ山。広瀬藩の象徴で、戦国時代、尼子氏の居城があったところとして有名。　探遍―口語的。いわゆる結果補語。近世の詩で多く用いられる。　春村―白居易に春村詩あり。　処々花―処処は、ところどころではなくて、どの場所も、あらゆるところでの意。蘇軾・山村五絶其一「春山村に入りて処処花なり」。

〔付記〕本稿は、
科研費基盤研究（C）研究課題／領域番号22K00340
近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩人と官僚・政党政治家の交遊の分析（期間二〇二二～二〇二四年度　研究代表者　要木純一）
及び、
島根大学法文学部山陰研究センター―　山陰研究共同プロジェクト　近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢

詩人と官僚・政党政治家の交遊の分析（番号二二一三　期間二〇二二～二〇二四年度　研究代表者 要木純一）
及び、
島根大学法文学部山陰研究センター　山陰研究プロジェクト　山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト（番号二二〇五　期間二〇二二～二〇二四年度　研究代表者　田中則雄）
による成果の一部である。